

し、分岐したものである。また、ⅡとⅢとは、必然的な相関者である。さらにまた、ⅠとⅡとは、ように合体することができる。

独立自営農民。ここでは所有と労働とが一致している。この点で、この人格は、完全性をもっており、Individuum（不可分割なもの）の名にふさわしい。しかし、この所有と労働との一致は、私的所有と私的労働との一致であるので、この人格は、他者を前提とし、あるいは、公共性を前提とするところの、単独性をもつにすぎない、ともいうことができる。経済的にいえば、独立自営農民は、他の独立自営農民と、市場とを前提とするところの、そして、競争の渦中に入っているところの人格である。いずれにせよ、このような型の人格は、歴史上では特異な人間像であるが、しかし、それは、ただちには、資本制的な人間像とはいえない。

独立自営農民は、貨幣地代の進行につれて出現した人格であるが、貨幣の出現とその普及は、人格に著しい変化をもたらしたのである。一言でいえば、一方では、人間に新しい共同体（市場）をつくりあげると同時に、他方では、抽象的な、孤立的な人格（私人といわれる）を形成した。しかし、これらの両側面は、外的にのみ結合したにすぎない。

この貨幣の支配において、人間には、自由と平等という属性が生れた。しかし、この自由と平等という2つの属性は、相互性の両側面であって、そこにおいては、自由は、自由競争であり、平等は、形式的な交換性である。つまり、自由の実質である自由競争は、不平等を目的としている。このような属性をもつ人間は、分裂しないわけにはいかない。

独立自営農民という所有と労働との一致した人格は、貨幣地代の進行に伴って形成されたが、この貨幣地代の進行は同時に、土地の無所有の出現を可能にする条件にもなっている。つまり、土地が市場をつうじて徹底的に収奪され、ここに土地の無所有が結果することもありうるのである。しかし、この無所有は、主要な生産手段であった土地にかんする無所有ではあるが、一切の無所有ではない。それは、労働力についてはいざんとして所有である。とくに、独立自営農民において、所有と労働との一致がいったん成立し、この崩壊として生じた、この土地の無所有、そして同時に、労働力の所有は、労働力の商品としての所有を保証しているのである。このような、商品所有者としての労働力の所有者もまた、新しい型の人格である。しかも、これは、決定的に新しい人格であって、資本制的な人間像である。この人格も、しかし、ある種の私

## 社会思想史における 「個人」概念の変遷

大 井 正

Transition of the Concept of "Individual"  
in the History of Human Social Thinking

Tadashi Oi

いわゆる「近代的」個人について

この研究は、端的にいえば、資本制的な私的所有の成立過程に即応して形成される人格について考究したものである。

資本制的な私的所有に第1の衝撃をあたえたモメントに、貨幣地代の発生がある。この貨幣地代の拡大に応じて、つぎの3つの人格が形成された。

独立自営農民 (Ⅰ)

資本制的借地農業者 (Ⅱ)

日雇労働者 (Ⅲ)

上記の中、ⅠとⅡとはともに借地農業者から成長

的所有者であるので、他者と対立するが、この対立者は、商品所有者一般ではなくて、とくに貨幣所有者である。この貨幣所有者もまた、資本制的な人格であるが、ここには、すでに所有と労働との一致は存在しない。